

田山花袋

夏目漱石の「門」



夏目漱石の「門」



「門」を読んで、最初に感じたことは、これだけの内容をこんなにも長く書かなくても好きそうなものだということである。これを三分の一くらいに緊張させて書いたら、もっと有効に作者の目的を達することが出来たろうと思っただ。この作は冗漫、煩瑣という評は甘んじて受けなければならぬ作品で、そしてその冗漫、煩瑣が別に意味を持って顕われても来ない。

宗助とお米の生活、それも深い細かい所まではいっ

て行っていない。作者の想像——平凡なる作者の想像で達することのできる範囲の平板な描写で、個物というようなどころまでは達していない。これが実際の社会にあったこととして考えて見ても、決して二人の生活はこんな単調な平凡なものではあるまいと思われる。一步を譲つて単調な平凡なものであつたにしても、こういうふうな単調平凡ではあるまいと思われる。第一、個物から来る生々とした色がもっと鮮やかに出なければならぬ。二人の生活状態が持つて分明はつきりと描かなければならぬ。二人の生活の周囲を取巻く空氣がもっと複雑した色をつけ

て来なければならぬ。

作者は三分の二くらいまで、この平凡な叙述をつゞけてそして始めて宗助とお米との前生を出しているが、これなども読者の好奇心を惹く上には、有効な手段かもしれないけれど、作品から言つては、甚だ不自然なことと言わなければならぬ。こゝまで読んで来て何だか余りにも唐突のような気がするのも、その叙述と描写が平衡を失得ていないところから起こつて来る感じであろうと思う。

次に作者は二人の前生を単なる説明で書いている。こ

れは「それから」に書いてあるからでもあらうが、この「門」という作品を単独なる作品として考えて見ると、この前生が、むしろ極力描写すべき所で、これがなくては全編が精神を失って了ったように思われる。それに、作者は作中人物の心理をよく抽象的に説明的に書いているので、それが理屈ほいような煩瑣な厭な感じを起こさせる。私はこの作を読みながら、「事実と想像」という問題を幾度となく頭に浮かべた。そして想像の多く憑むべからざることをつくづく思った。「門」読過後の感は、作者が二人の生活を再現して見せてくれたというより



も、説明して聞かせてくれたという感じである。感じが無理に押しつけられるようで、背景を味うというような深い味が出て来ない。

(明治四十四年四月 「文章世界」)



日本文学電子図書館

---

夏目漱石の「門」

著 者 田山花袋  
制作者 宮澤一郎  
底 本 「漱石全集 第8巻」角川書店  
昭和42年10月10日5版発行

---

日本文学電子図書館